

巻頭言

ここでいま、われわれはどのように生きているか、またどのように生きるべきであるか、このような問いは、常にわれわれに立ち現われる問いである。人類はこの世界において、気候変動や核兵器の脅威に直面して、滅亡の危機に瀕している未曾有の時代に生きている、と言われる。それだけではない。現実的な世界におけるより具体的で悲惨な問題に対峙し、日々そのような問題に応答することが求められてもいる。それほどまでに、現実の世界は、われわれの生に対して、多くの厳しい問いを投げかけている。

しかしこのような問いだけが、現実の世界の専有事項なのではない。どれだけ、様々な面で、以前よりも、よりよくなっている状況の恩恵をわれわれはこうもっていることであろうか。以前であれば、それに罹ることで、存在し続けることができなくなる病が、革新的な医療技術の開発によって治療可能となり、人間は存在し、生きることができるようになった。また、様々な IT 技術の発展によって、どれだけ遠い地域に住む様々な人々とも、瞬時にコミュニケーションをとり、関係を深めることができるようになったことであろうか。

もちろん、現在生きている世界が、よりよくなっていると、楽観視することは決してできない。どれだけ多くの人々が、そしてわれわれ自身も、苦しみのなかを生きていることであろうか。それでも私は、人が一生をかけて、ほんの少しでも、世界がよりよくなってほしいと願い、行為し、そして生きている事態がもつ可能性を信じたいと思う。先人が、そして現在生きている人たち、そして存在が、自分のすべてを振り絞り紡いだことばを、思索を、そのようなことばを自分に醸成させ、力強く生きたその行為を、そして生きるということそれ自体を、信じたい。

このような考えのもと、このたび、京都大学大学院教育学研究科教育哲学研究室紀要『人間形成研究』を創刊することとなった。本教育哲学研究室は、日露戦争の2年後の1906年に創設された、京都帝国大学文科大学の教育学教授法講座に遡る。本講座の初代教授は、谷本富であり、わが国で初めて教育学が教えられた東京帝国大学で、とりわけドイツ・ヘルバルト主義の教育学を学んだのち、ヨーロッパに留学し思索を深めた学者である。谷本は、教育学・人間学の基盤となる民族心理学・国民心理学をとりわけ学びたいとし、まずはフランス・パリに居を構えて思索を深め、万国博覧会などにも足を運んでいる。次いでドイツ・ライプツィヒに移り、さらに見聞を広めながら思索し、今度は犯罪心理学を学ぶためにイタリアに留学している。その後、チェコなどを経て、イギリスに渡り、さらにはアメリカではシカゴのデューイ・スクールを訪問するなど、精力的に「世界」の教育を自分の目で見て、考え、自分の研究を新たに発展させている。とりわけ、当時新たに出現してい

た新教育に共感しながら、日本的な教育とヨーロッパの新教育を中心にした教育を融合・発展させるべく、研究を深めている。興味深いことは、谷本が、地理教育をことのほか重視しているとともに、当時すでにコスモポリタニズムにも言及しつつ、自分の最後の研究は、シュタイナーの思想の研究にあるとしている点である。このような谷本富教授が、本研究室の初代教授であったことは、本研究室を考える上で重要であると思われる。

先人が何を考えたのかを繙き、そのような先人が深めた思索をよい意味で受け継ぎ発展させることは、学問研究の一つの重要なあり方である。カントもハイデッガーも、先人の思索を一切無視して、一から完全に独自の思索を生み出したわけではない。ある面ではある哲学・思想をより肯定的に引き受けながら、またある面ではそれらを根本的に批判しながら考えることで、新しい哲学・思想は生み出されてきた。このことを踏まえるならば、われわれは本研究室に連なる先人の思索に学びながら、さらに根本的にそれらの思索を批判して、新たに自分の思索を生み出し、展開することが求められている。このような場としてより身近でかつより開かれているのが、このたび創刊することとなった、研究室紀要である『人間形成研究』である。

学術的な出版物は、大きく二つに分けられる。査読付きの学術学会誌の論文と、著作、である。前者は当然のことながら、学会誌編集委員会の厳格な審査を通過した論文でないと掲載・出版されない。後者は、ある程度の業績のある研究者や、出版助成を得た研究者等でないと、出版することが難しい。このような状況では、両方のいずれにも適さない研究者の論文は、日の目を見ないことになる。しかし、歴史が示しているように、学会誌の形態の条件（分量、先行研究の有無、編集委員の審査など）に合わない論文でも優れた論文や研究は多数存在する。むしろ学会誌という制約にそもそも合わない、新しく独自の研究が、次の時代を切り拓く重要な研究になることも考えられる。本研究室紀要は、そのような認識のもと、先人の思索と対峙しながらより自由に考察する独自の研究をも歓迎しながら、創刊した。このような研究室紀要が、現実の世界の教育学研究を問い直し、議論を巻き起こし、発展させる力になることを願ってやまない。

2024年3月

教育哲学研究室（教育哲学コース）准教授 広瀬悠三